国土審議会第５回半島振興対策部会

平成２４年１１月２３日

安島部会長：それでは皆さん、早速ですが、ただいまから「国土審議会第５回半島振興対策部会」を開催いたします。冒頭に事務局より、本日の会議の公開の扱いと資料の確認等をお願いします。

長崎地方振興課長：まず、会議の公開について国土審議会運営規則第５条の規定により、国土審議会の会議は原則として公開することとされております。これは同運営規則第８条２項の規定により、当部会にも準用されているところです。したがいまして、当部会でも本審議会の方針に従い、会議、議事録共に原則公開することとし、本日の会議も一般の方々に傍聴いただいております。この点につきましてあらかじめご了承くださいますよう、よろしくお願いいたします。

次にお手元の資料を確認させていただきます。「次第」の次に、配付資料一覧として資料があります。資料１として「国土審議会半島振興対策部会委員名簿」、資料２として、横長のパワーポイントで「紀伊地域をめぐる状況について」というものがございます。それから参考資料として、半島振興法、その他関係法令等の抜き刷りがございます。資料につきましては以上ですが、もし不足のもの等ございましたらお知らせくださいますようお願いいたします。――よろしいでしょうか。

それでは続きまして、今回が初めての委員もおられますので、改めて委員を紹介させていただきます。正面にお座りいただいております、安島部会長です。

安島部会長：安島です。

長崎地方振興課長：続きまして、正面向かって左手のほうになります、沖委員です。

沖委員：沖です。よろしくお願いします。

長崎地方振興課長：そのお隣、鈴木特別委員です。

鈴木委員：鈴木です。よろしくお願いします。

長崎地方振興課長：そのお隣、仁坂特別委員です。

仁坂委員：よろしくお願いします。

長崎地方振興課長：今度は正面右手のほうにまいります。まず、岡部特別委員です。

岡部委員：よろしくお願いします。

長崎地方振興課長：続きまして、田中特別委員です。

田中委員：田中です。よろしくお願いします。

長崎地方振興課長：最後に、野口特別委員です。

野口委員：野口です。よろしくお願いします。

長崎地方振興課長：なお、本日は、原田委員及び中嶋特別委員はご都合により、欠席との連絡をいただいております。引き続き、事務局側の出席者について異動もございましたので紹介させていただきます。国土政策局の渡延審議官です。

渡延審議官：渡延です。

長崎地方振興課長：私は地方振興課長の長崎です。よろしくお願いします。それから、金子半島振興室長です。

金子半島振興室長：よろしくお願いします。

長崎地方振興課長：本日は半島振興法の主務省の一つであります、農林水産省の担当者と和歌山県の担当者の方々にも出席いただいています。なお、本日は本半島振興対策部会の定足数を満たしていることを、念のため申し添えます。

それでは以後の議事進行につきましては、安島部会長からお願いしたいと存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

安島部会長：それでは進行させていただきます。まず、渡延審議官よりご挨拶を頂戴したいと思います。

渡延審議官：改めまして国土交通省の渡延です。本日、国土審議会第５回半島振興対策部会の開催に当たりまして一言ご挨拶を申し上げます。委員の皆様方におかれましては、ご多用中、また本日、国民の祝日の勤労感謝の日ですが、祝日にもかかわらず、この部会にご出席をいただきまして、まことにありがとうございます。平素から半島地域の振興をはじめとして、国土交通行政の推進に並々ならぬご指導とご協力を賜っておりますことに、この場をお借りしまして改めて感謝を申し上げる次第です。

特に今回はこの部会の開催に先立ちまして、後ほど申し上げます現場の視点で半島地域の課題等を把握するため、昨日からこの和歌山県下で現地調査を実施させていただきました。２日間にわたりまして、非常にハードな行程でしたが委員の皆様には、大変熱心に視察、ヒアリングを行っていただきましたことに改めて感謝を申し上げます。

何よりこの調査の実施に当たりまして、和歌山県知事であります仁坂特別委員以下、和歌山県の皆様方に大変にお世話になったところでございますが、特に過疎対策課の皆様に大変お世話になりました。ありがとうございました。また、視察先は広範多岐に及びました。すさみ町、串本町から那智勝浦町、田辺市のそれぞれ所在の漁業協同組合、森林組合、また地域振興に当たる協議会の皆様方、多数の方々に大変お世話になり、いろいろ新たな見聞を開かせていただいたところです。皆様方に改めて厚く御

礼を申し上げる次第です。

この部会のテーマでございます半島振興法は昭和60年に法が制定されました。この制定に当たりまして、当時の県知事をお務めでした仮谷志良様の大変なご尽力があったと伺っております。いわばそうした半島振興に係る法制度の原点とも言えます、この和歌山の地でこの部会が開催されますことを大変有意義なことと考えているところです。

すでに前回の第４回半島振興対策部会において、この法律の平成27年３月末の期限切れを念頭に置きまして見直し検討のキックオフをしたところです。その際に委員の先生方からは、これまでの対策の実施状況の総括、それからもう一つは半島振興対策の対象地域の実態を踏まえること。この二つのご意見があったように伺っております。本日、この部会はそうしたご提議に応える形で開催されたものです。

改めて申し上げるまでもございませんが、本日、私ども事務局も委員にお供しまして、和歌山を広く回ってまいりました。半島地域は三方を海に囲まれ、幹線交通体系から離れており、また地形も急峻だとこのように解説書でも説明しているところでございます。２日間のバスに揺られての長い行程を通じて、身をもってそれを味わったところです。

また、昨年は大変災害の多い年でした。３・11に加えて、当地では昨年、台風第12号の大きな災害があり、56 名という非常に多くの貴重な人命が失われたというお話のご披露もございました。今なお行方不明の方もおられるということでした。お亡くなりになりました皆様、被害を受けました皆様に改めてお悔やみを申し上げる次第でございます。また、そうした半島地域での防災対策、同時に串本でも津波の問題について町長からいろいろお話を伺ったりしましたが、改めて海と山に迫られている半島地域における防災対策の必要性を痛感したところです。

同時に、半島について、高齢化、過疎化が進行する中で、幾つか将来のヒントとなるような明るい話もこの２日間で見聞きさせていただいたところでございます。マグロを代表とする農林水産物や、本日、那智勝浦町で拝見した棚田に象徴される景観、さらには地域ブランドを目指す農産物の６次産業化の試み等々、地域固有の資源を生かしての半島地域の活性化に向けた皆様方の取り組み、その一端にまだ触れただけでございますが、今後の大きな発展の可能性を秘めているものと考えているところでございます。

私どもとしましては、ぜひこの機会に、この部会において今後の半島振興対策について、委員の皆様のご意見を改めて賜り、検討、議論を深める契機とさせていただけ

ればと考えているところです。

到着が遅れたりしまして時間が限られておりますが、どうか委員の皆様方には、部会長差配のもと、活発なご議論をお願い申し上げるところでございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

安島部会長：どうもありがとうございました。今回は部会の開催に先立ちまして、昨日今日の２日間にわたりまして紀伊地域の現地調査をいたしました。和歌山県内の視察をさせていただきました。今回の現地調査の実施に当たりまして、仁坂知事のご高配を賜り、県庁のご担当部局のご尽力をいただいたところです。この場をかりまして、知事をはじめ、いろいろとご準備いただきました和歌山県庁の皆様に対しまして、深く感謝を申し上げます。

ここで和歌山県知事である仁坂特別委員よりご挨拶をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

仁坂委員：皆さん、本当に和歌山にお越しいただきましてありがとうございました。私もおかげさまで、高名な皆様方と一緒に、半島地域に関する議論に参加できて大変ありがたいなと思っております。ご紹介ありました仮谷さんという知事がおられまして、もうお亡くなりになったのですが回想録を読んでおりましたら、非常に大きな自分の思い出としてこの半島振興法を作ってもらったということを書いておりまして、なかなか感激的なものがございます。

その仮谷さんのおかげで、和歌山県も、半島振興に関する協議会がありますが、これの会長をずっと務めさせていただいております。それからまたこういう国土審議会の皆様方に、これは初めてだそうですけれども、視察先として、あるいは議論の先としてこの和歌山を選んでいただいたのは大変ありがたいなと思っております。

大体こういうところへ来ますと、半島地域にいる我々は、「あれも悪い」「これも悪い」とたくさんいろいろ言います。これは全部事実ですが、しかしあまり言うてもしょうがないことと、それから言っておかなきゃいけないことと、二つがあると思います。大体、私はあまり人前でしゃべるときに、「あれが悪い」「これが悪い」と言うのはやめているのですが、本当はたくさん悪いことがあるのであります。

二つ挙げますと、一つは半島地域に特有のいろんなデータがあります。例えば高齢化比率がどうとか、あるいは成長率がどうだとか、それから交通の便がどうだとか、あるいは水処理、下水道処理の進捗がどうだとかそういうことがたくさんあります。そういう点についても、これからもなかなか大変な地域だということを念頭に置いて政策をやっていただきたいと思う次第であります。

もう一つはこの紀伊半島に関することです。山あり、谷あり、海あり、崖あり、海岸ありということでなかなか大変そうに見えます。それはそれでまたいいところもありまして、それ自体が悩みの種だとあまり思っておりません。

ただ、例えば高速道路の話なんかは、この紀伊半島はミッシングリンクがあって、これは大変です。これも、しかしまだ造っていただいてないところの我々が言うべき話か、言うべき話じゃないか、あるいは順番をどうすべきだと思うかどうか、ということは非常に論理的な話だということを、もう一度、政策当局は考えなければいけないと思います。

例えば高速道路の４車線化の話があります。高速道路はこの白浜のところまではまだ来ておりませんけど、もうちょっと手前の田辺まで大阪から来ています。有田のところぐらいまで４車化されていますが、その後、４車化されておりません。渋滞がものすごいものですから、何とか４車化してほしいなということは思います。じゃあそれは地域の単なるお願いなのか、それともやらなきゃいけないような話なのか、それを客観的に論理的に考えるべきだと私は思います。

実はアバウトに申し上げますと、この地域の高速道路は日本で一番混んでいる、交通量の多い高速道路です。それからまたB/C（ビーバイシー）という手法があって、私は決してそれ自体間違った手法と思いません。しかし、B/Cの手法というのは明らかに経済学から考えるとおかしい。屈曲点のあるときに、従来のデータだけで判断するというのは計量経済学の手法として、全く間違っている。

その証拠に、和歌山の高速道路というのは、あの甘いと言われる国土交通省の交通量見通しよりも、はるかに実現したときに多く出るんです。それは人々の意思決定が変わって、それで多く出るということです。そういうことを補正しようと思ったら簡単にできるんです。近隣のデータで補正したらいいのに、それすらしないというようなことは科学的な政策じゃないと思うわけです。

さらに和歌山県に関しては、津波が来ると思います。水害はどこでもあると思いますので、和歌山県も、もう大丈夫だろうと思ったらやられちゃいました。だけどそれは普通のことでございますので、国にも助けていただきながら我々も頑張って、今日も行けるところは全部行けると思うんです。そういうふうにあっという間に、少なくとも行けるようにはしました。完全な本格工事復旧も、例えば 95%は今年中にやってしまおうというぐらいの感じで一所懸命やっています。

それから、避難した方々も、和歌山も多分１万人ぐらい出たと思うのですが、今はあと数十人ぐらいになっています。つまり自分の家に住めなかった方が１万人ぐらい

いたと思いますが、そのうち 5,000 戸以上が床上浸水です。避難者があと数十人ぐらいになって、この人たちの面倒を最後まで見るということです。

津波も、我々は逃げる方向に関して、日本一優れたやり方をとっていると思っています。避難路も一所懸命に作って。南海トラフでは、想定で 6 万人亡くなると言われています。少なくとも、プレート型の地震は必ず来るわけです。これは確率で言うと 30 年間に 70%ということになっています。南海トラフに比べると３分の１か２分の１です。それでも分数、何分で来るかというのはほとんど一緒ぐらいです。和歌山県の悩みは――これは宮城県も一緒ですが、その震源域と想定されるところがものすごく近くなっているので、実は努力をしても逃げられない地域があるということです。

今度、それは次なる論理の問題で、我々はそれを放置するわけにはいかん。「逃げなさい」と言ったって絶対死ぬ。しかし、死者をゼロにしたいと思っております。それならば、高台移転か、巨大ビルを作って逃げられるようにするか、どっちかしかないなと。そういうことを助けていただくというのは、すでにやられた東北地方と同じぐらいの手厚さであってしかるべきなのでないかと。これは論理の問題というふうに思いますが。

というようなことをいろいろ議論していただいて、それで科学的な行政を半島地域に関してもやっていただいたらいいのでないかということを私は思っている次第です。田舎だからと言って、決して甘えているものではありません。我々はやることをやっています。今日見ていただいたように、ユズを作って一所懸命出すとか。それから他地域の人たちを一所懸命受け入れて、移住・交流の基地をつくっていこうとか、さまざまな取り組みをみんなが一所懸命やっております。

そういうことを支える論理的な土壌として、この半島地域の振興計画、振興対策が、あるいは振興システムがあっていいんじゃないかなと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

安島部会長：どうもありがとうございました。本日の議題は「紀伊地域の現況と課題について」です。昨日、本日と、半島地域の現況を把握するために紀伊半島内を調査してまいりました。本日の部会ではその調査を踏まえまして、フリーにディスカッションをしたいと考えています。

それではその前に、紀伊半島の概況につきまして、事務局が補足説明資料を用意していただいていますので、説明をお願いしたいと思います。

金子半島振興室長：それでは説明申し上げます。お手元の資料２をご覧ください。前回６月の半島部会におきまして、半島地域の現状についての基本的なデータを半島全体の

データの形で、整備と進捗状況等のご説明を差し上げているかと思います。それについて、もう少し、実際に現場の抱えている問題を細かく見るべきであるというようなご意見が多かったというふうに承知しています。

昨日と本日、延べ２日間にわたって現地調査で見ていただいた訳でございますが、ここでは補足資料として、地図データ、GIS のデータを使いまして、紀伊半島全体を俯瞰するような形で、マクロのデータと実際の現場での実感というものの間を埋める形で、補足説明をさせていただきます。

まず１番の人口密度のデータです。これは言わずもがなですが、沿岸部に、比較的人口が多い地域が分布していると。色でいいますと、茶色っぽいのが１平方キロ当たり 4,000 人です。これはメッシュデータですけれど、大体 DID のようなものというふうにお考えいただけると思います。赤が 1,000 人から 4,000 人未満、1,000 人以下、色が薄くなるにつれて小さくなり、グレーは人が住んでいないメッシュです。こういうことから見て、大体人口は海辺に分布しているということです。

次に１枚おめくりいただきます。これが、特に人口の高齢化率と地形といいますか、標高の関係を示しているものです。色が緑色系でついています。一番薄い、色が塗っていないところが 50 メートル未満。以下、薄いブルーが 50 メートルから 100 メートル、そこから緑色でだんだん濃くなっていくということです。ちなみに沿岸、海岸線の青く塗っているところがあります。これは山の中を突っ切っている線も含めて、紀伊半島地域で指定されている地域です。

ちょっと見づらいですが、ここの絵に青や赤のドットが打ってあるかと思います。これが、１キロメッシュの高齢化率を示しています。青い色が 20%未満、黄色が 20%から 50%未満、赤が 50%以上ということで、これが平成 17 年の国勢調査の高齢化率です。

ご覧いただきますとおり、比較的、標高の高い内陸部、それから半島先端部に、高齢化率の高い地域、赤いドットが分布していることが見てとれるわけです。半島の先端部――昨日と本日ご覧いただいた部分は、標高 50 メートル未満の土地がほとんどない状態であって、かつ高齢化率の高い集落が分布していることがご覧いただけるかと思います。

ちなみにこのメッシュの数を参考までに申し上げます。全体でメッシュは約１万ほどがこの中にあります。その中で人口のいる、居住地になっているメッシュが 3303 あります。その中に高齢化率 50%以上――この赤い点のメッシュが 644 あります。644 の内訳を見ますと、標高が 200 メートル以上のところに 549（全体の 85%）あるとい

うことで、高齢化した集落はやはり山の中に分布をしているということです。

ちなみに各高さ別のメッシュの中で、高齢化率 50%以上の地区はどれぐらいの割合があるかというな見方をしますと、標高が 200 メートル以上 300 メートル未満のところで 29.2%ですから、３割弱が 50%以上の高齢化率と。300 メートル以上になりますと 41.2%、400 メートル以上で 45.8%というふうにどんどん上がっていくという状況です。

１枚おめくりいただきまして、今度は高齢化率と平均傾斜度の関係を同じように表したものです。色を塗っていないところが 10 度未満の傾斜度、以後、青が 10 度から 20 度、以後、緑で徐々に上がっていくということです。これで見ても半島先端部は海沿いまで急峻な地形であることがご覧いただけるかと思います。そこに高齢化率の高いメッシュがたくさん分布しているということです。

これもデータで申し上げますと、先ほどの高齢化率 50%以上のメッシュのうち、傾斜 20 度以上のところにあるものが 71%ということです。やはりそういう非常に斜度のきついような山がちなエリアに高齢化した集落があるということです。

また１枚おめくりいただきまして、今度は高齢化率の分布と道路網の掛け合わせをしたものです。緑の線で描かれているのが、主要道路網ということで国道、県道です。やや太めの線で描いたところが、道路計画上は改良済みということになる、幅 5.5 メートル以上の、すれ違いができる道路ということであり、細い線が幅 5.5 メートル未満の道路です。

山の中にある高齢化集落というのは、そういった細い道路の沿道にもあり、そういったところの救急輸送とか、日常の交通には困難性が非常にあるのでないかというふうに想像されるところです。

また１枚めくっていただきまして、今度は人口の増減で、これは平成 17 年、22 年の５カ年間の増減を色で示したものです。半島全体として人口減ということであるわけでございますが、中でも内陸部、それから先端部の地域に、緑色の一番濃いところが５年間での人口が 10%以上減っている地域ですが、そういった地域が分布しているという状況にございます。

また１枚おめくりいただきまして、今度は生産年齢人口の増減率です。それに合わせて工場立地の動向を示しています。この場合、生産年齢人口、つまり 15 歳から 64 歳の人口が平成 17 年から 22 年の５年間でどれぐらい増減したかということで見ましてもやはり半島全体として減少ですし、特に同じように、尾鷲から先端部の市町村において、非常に減少が見られます。ちなみにこれはデータの傾向を見るために旧市町

村での表示になっています。

そして、この中に赤い星が――和歌山市の周辺、橋本市、五條市のあたりとか、伊勢・松阪のほうを中心に分布しています。これは平成 19 年から平成 22 年までの３カ年間に、1,000 平方メートル以上の用地を取得して工場を作ったというところを示しているものですが、やはり半島の根元に近いところ、あるいは交通の便のいいところ、紀の川沿いのような水の便もあるのかもしれませんが、そういった条件のいいところに分布をしている傾向がございます。こういったところは、生産年齢人口の減少率も、比較的小さいという傾向にあります。もちろんこれだけが要因ではありませんが、そういった状況です。

それから１枚、まためくっていただきます。その次が、社会増減率のデータと通勤・通学の OD を重ねたものです。社会増減ということでいいますと、全体に社会減の傾向が見られるわけです。やはり山の中の内陸部で減少ぎみというところが見えています。

通勤通学で見ますと、内陸部の周辺の市町村から、沿岸地域に通勤通学するという傾向があります。この線の細いところが、22 年国勢調査で５％以上の通勤通学先になっているところで、太い線になりますと 20%以上ということです。和歌山市とか、御坊市を中心に、それから三重県下ではやはり松阪、伊勢といったところに通勤通学が見られるということです。例えばこういったエリアには、工場立地等もありますし、そういった都市的なところが半島地域内の雇用を吸収していることがいえると思います。

それから、また１枚めくっていただきます。その次が高速道路のインターチェンジからの 30 分アクセスが可能なメッシュを均等に塗ったものです。それぞれの高速道路も落としています。那智勝浦、それから尾鷲のあたりに、部分開業をしているところがありますので、データとしてはそこが微妙なところがあります。居住人口のあるメッシュ 3,303 のうち、30 分内にインターにアクセスできるところが 1,942 ということで 58.8%と。裏を返せば、４割以上の地域が 30 分で高速道路にアクセスできないというような分析結果です。

また１枚おめくりいただきます。今度は新幹線の駅からのアクセス時間です。東海道新幹線、山陽新幹線から離れた地域ですので時間が要するわけですが、この中で赤は１時間以内、オレンジ色が２時間以内、黄色が３時間以内、緑が４時間以内、白いところはそれ以上ということです。

この半島の中でいいますと、２時間以内に新幹線の駅にたどり着けるエリアが、居住者のいるメッシュでは 1,377 ということで、41.7%が該当すると。居住者がいないところもありますので、この地図上の面積ほどにはこういうような状況ではないので

すけれども、いずれにしても、６割近くは新幹線の駅まで、２時間以上要するということです。

また１枚おめくりいただいて、今度は災害の関係です。昨日と本日も、国道 42 号や 311 号をはじめ、災害の現地をご視察いただいたところです。これはいわゆる土砂災害危険箇所と道路網の関係を示したものです。

赤い線が、いわゆる半島循環道路に指定されている道路です。そして黄色く塗り潰しているところが、土砂災害危険箇所ということでございます。これは紀伊半島の南半分を抜き出したところですが、海辺を走る国道 42 号沿いにもかなりたくさんの土砂災害危険箇所があります。これらが寸断されますと、かなり交通に支障があるということが容易に認められるかと思います。また、当然、内陸にも多数それと同じようなところがございます。昨年の災害、台風におきましても、かなり被害があり、影響があったと聞いています。こういった危険箇所が大きく分布をしており、地域交通に大きな影響を及ぼす可能性が高いということです。

それから次が人口の分布と医療機関の分布を見たものです。見づらくて恐縮です。青い十字のマークが三次救急医療機関、緑色の丸が、二次救急医療機関ということで日常的な医療機関というより、救急時の医療機関はどこにあるかというものを示したものです。そういった高度な医療機関は海辺に多く、沿岸部を中心に立地をしていて、内陸部では、アクセスが困難な地域が多いということです。

ということで、雑駁でございますが、今回の視察に関係あるようなデータにつきまして、概況のご説明を申し上げました。事務局からは以上です。

安島部会長：ありがとうございました。それでは時間まで、１時間程度です。自由にご議論をお願いしたいと思います。防災の対策、観光、農林水産業の振興といったさまざまな視点で現地を見せていただきました。現地をご覧いただいた上での率直な感想などをいただきたいと思います。いかがでしょうか。

まず、感想を伺ってからその論点について、少し議論をしたいと思います。簡単で結構です。それでは沖委員から一言ずつお願いします。

沖委員：今回は視察をさせていただきまして、どうもありがとうございました。いろいろと勉強させていただきました。過疎地域にまいりましたときに、一番思ったのは健康で文化的に暮らすには何が必要だろうかということです。道路、交通、水、電気、ガス、テレビ、携帯電話、そしてインターネットが非常に大事であるということを今回教えていただきました。さらにはそれらと学校、医療、郵便、警察、そして金融の決済、そして何より仕事、雇用がそれぞれが独立でなく非常に絡み合っているわけです。

今、申し上げた中で、いわゆるインフラ整備としてできること、あるいは政府や自治体がやることだけではなく、民間が担っている生活基盤というのが非常に今大きくなっていることも私は実感いたしました。そうした中でこうした半島振興、あるいは過疎地の振興ということに対して行政ができることは何だろうかということを改めて今、考えさせられています。

私の専門である水に関して申します。上水道の普及率がほぼ100%なのでもう大丈夫なのかと思っていたら、案外、脆弱な状況に置かれていて、普段はよくても、例えば水害があるとそれによって取水する施設が破壊されてしまって、安定して得られないといった状況にあるんだということも、今回は勉強させていただいたような気がいたします。

安島部会長：ありがとうございました。では鈴木委員、お願いします。

鈴木委員：今日は効率よく回っていただいて本当に勉強になりました。ありがとうございました。

和歌山県の半島を回ってみて、災害の問題にしても、条件不利地域の生活にしても、冷静に対応されていると思いました。厳しい現状にヒステリックになるということはなくて。その背景には、この半島地域だからこそ、バランスがいいということを思いました。

自然系もあるし、生活系もあるし、それから和歌山は文化系という、この三つの要素がバランスよく成り立っています。条件不利だけれども、条件を有利に生かしています。言ってもしょうがないことは言ってもしょうがないと。地理的・地形的条件の悪いところを冷静に対応しています。例えば、那智勝浦町色川地区の住民の方から高速道路に併せて自転車道路の提案があり、車だけに頼るのではない生活についても考えるなど未来社会を考えると非常にバランスがいい意見だなと感じました。

生活と産業と文化の三つが存在し、半島は三方が海に囲まれているということ、熊野神社も三つの神様ということを聞きました。三つはバランスがいい。生活を大切にしていく生き方、そして産業も新しい活力を生み出していくようなことも生まれてきているし、歴史的な文化を生かしているというか、結構バランスよくやっていて、未来はこうした半島地域から出てくるのかなと感じました。

安島部会長：ありがとうございました。それでは岡部委員、お願いします。

岡部委員：私は、昨日の夜から参加させていただいて、１泊――実質１日で紀伊半島を半周させていただきました。それがすごく大変なことだということもよくわかりました。個人的には、この田辺市の南方熊楠顕彰館の設計に携わらせていただき、それ以来訪

れました。また、今日は熊野古道がスペインのサンティアゴ巡礼の道と深い関係があるということをお聞きしました。私はスペインに10年住んでいまして、あちらのガリシア地方でも仕事をしていたことがあるものですから、いろんな意味で和歌山県とは縁があるなと感じながら、短い間でしたけれども、いろいろ学ばせていただきました。

冒頭で、沖委員が「健康で文化的な生活をするためには、いろいろなものがない」というお話がありました。確かに近代的な意味では「ない」部分があるけれど、逆に今、私たちが都会で、これで本当に、健康で文化的な生活なんだろうかと。その「ないな」と漠然と思っているものがあるところでもあるというふうに、感じました。大きい温泉もあったり、豊かな自然に寄り添うような形で生活されていると。何よりも時間の流れが、本来、人間が健康で文化的な生活をするにあまりにも都会の生活が速くなり過ぎている中で、ゆったりとした生活と流れがあり、より私たちが今失っている生活の基盤というものを再発見させられた気がしました。

安島部会長：ありがとうございました。では田中委員、お願いします。

田中委員：防災という観点でお話をします。従来にない津波という非常に困難な災害に対応するということで、昨日、串本町の町長さんのお話を聞かせていただいたわけです。私たちの町と同じような状況なので、悩みは全く同じだな、というような感じを実は受けたわけです。

田んぼで道も曲がっているし、山も急な、それから平らなところは高さが低いもので、普通の雨、特に津波なんかにも非常に弱いということで、防災という面に関しては非常に脆弱というか、弱い立場にあるということで、人が生きていくための基本的な部分の整備というのは、これからも国にも続けていってもらう必要があるのではないかと思っています。

人が生活する上では、そういうものだけの中で生活しているわけではないので、人間として人間らしく生きるということはまた全然別の問題でして、防災面だけでは、語ることができないと思います。

私は、こういう半島地域は人として生きる場合に、非常に楽しくて希望の持てる、これからの場所になるのではないかと思っています。東日本大震災以後、人の価値観ががらっと変わりましたので、我々の地域も希望の持てる地域になるのではないかと思っています。

安島部会長：ありがとうございました。それでは野口委員、お願いします。

野口委員：まず、こちらの県の方々の担当部署は――知事、後で見てください。大変に、素晴らしい資料を作ってくださいました。この資料に本当に感謝する、丁寧なおもて

なしを受けまして、それをまず褒めたいなと思いました。

昨日から回らせていただいて、私が非常に印象深かったことがあります。「辛抱」という言葉が２回出てきました。一つの辛抱という言葉は、最初のすさみ（町）のほうで、「過疎というのは、辛抱なんですよ」というふうに、そんな言葉が出てきました。雨が降れば水が濁ってしまう、これも辛抱で、しょうがないと思うと。バスがないんだったらそれもしょうがないと思うと。そこまで行くのに炎天下の夏、延々歩くのもしょうがないと思うと。過疎というのは辛抱なんですよという、すごく辛い言葉を聞いてしまったなと思いました。一方、もう一つの辛抱という言葉を那智勝浦町の色川地区で聞きました。Ｉターンをたくさん受け入れていらっしゃるところです。そこで宿命的な地域住民（そこに生まれた方）と、選択してそこに移動してきていらっしゃった地域住民の方の間で、いろいろと差があってその中でときに嫌なことがある。地元にずっといらっしゃる方にとってみたら、外から来た人がちょっと都市型の横柄なところとか、傲慢なところがすごく嫌であると。だけど、それをもともと住んでいる者が多少引いて辛抱しているそうです。「それは時間かかるけどもやっているんですよ」と、すごくふくよかに辛抱しているというか、いい意味で、一歩引いて辛抱してらっしゃるというお言葉を聞きました。この２種類の辛抱という言葉に出会ったことが私にとってはすごく印象的でした。

色川の方々の活動は、素晴らしいなと思いました。田舎のおじさんというとお酒飲んでわーとかしてるだけのような印象だったんですけども、大変知的で、地域おこしにおいて立派な、ぶれない考え方をお持ちです。「毎日、家族が家庭でどんなことをしゃべっているか、それが地域のレベルというか、地域をこれからよくしていくための一番大事なことであって、それが全てなのです」というお話を伺いました。「こんなところに生まれちゃって」とか「こんなんでしょうがない、しょうがない。後も継ぐ人いない」なんて話じゃなくて、「この地域は素晴らしい。あれはいい。こんな人が来た、こうだ、ああだ」という毎日の前向きの会話で、変わっていくというお話でした。本当に目からうろこで、素晴らしい言葉に出会えたなと思いました。そんなような出会いがあってうれしかったです。以上です。

安島部会長：ありがとうございます。私も委員の一人として、少しだけお話しさせていただきます。

この部会では、これまでどちらかというと条件不利地域のことについて、いろいろと議論をしてきました。しかし、今回、紀伊半島にまいりまして、津波のこと、水害のことと、衝撃的な出来事でございました。これへの対応というものを、これまでやっ

てきた条件不利に加えてやはり考えていかざるを得ないと思っています。

それから個別には、地区ごとにいろいろな条件不利を克服すべきことがいろいろあると感じました。新たな津波とかを考えますと、より効率的に限られた予算を、合理的に使うことを考えていかなければならないなと思いました。

ここ何年か、この条件不利地域を置かれた状況をどのように計るかということで、いろいろな指標をとってきたわけです。それが高齢化とか、高速道路までの距離とか、新幹線までの時間とか、そういうようなことをやってきたのです。その指標だけで、この半島地域を評価しているといつまでたってもこれは追いつかないということで、もっと半島地域ならではの、良いこともあるのではないかということが、前々から話に出ていました。もう少しこの半島でこそ、豊かに暮らせることがあるのでないかと。そういう指標も入れないと正しく地域を捉えられないのではないかと議論を続けてきたわけです。

色川地区の皆さんのお話等を聞きますと、本当に皆さんは満足して暮らしておられる様子でした。実際にお嫁さんまで外から来ている方も多いみたいなので少しそのような指標自体を、考えるというきっかけにしていけたらと良いと思っています。簡単ですが、そんなことを思いました。

それでは、今、皆さん、一通りお話を聞きましたので、お気づきになった点、またさらに議論を深めたいと思います。どうぞ、田中委員から。

田中委員：もう２年すると、今の法律が切れるわけです。実は私のところは、昭和 25、26 年が人口のピークで、約５万人ちょっとでした。それから終始一貫、人口の減少がずっと続いています。一回も前の年を超えたことはありません。あれだけ世の中が神武景気とか、いろんな何とか景気とかいうような時代を過ぎた訳なのですが、終始一貫、人口が減っているわけです。

江田島市は、広島市の目の前、呉市の目の前で非常に地理的には状況のいい場所ですが、なぜかずっと人口が減っています。もし人が減ることに、「過疎」という言葉を使うのでしたら、私の町は昭和 25、26 年ごろから過疎がずっと続いています。

「過疎」「過疎」と言って、現在みんなが非常に敏感になっているのはどうも、私の考えではいわゆる限界集落の段階へ来て初めて「これはどうにかせんといけんぞ」というような形になって、本来はもっと早く、警鐘を鳴らすべきであったと思います。

私の町では、広島市や呉市へ便利で早く通勤通学できるための整備だけに投資してきてしまった。地元へ人が帰ってくるような形の投資をしてこなかったということが、私は実際に市政を担ってみて、現在、非常にそのあたりのことを強く感じているわけ

です。

今後、法律が切れるときには、この「過疎」という言葉そのものを使っていいじゃろうか、どうじゃろうかということは本当に考えていただいて、法律の名前を作るときにもう少し何か明るいイメージで法律を作っていただいて、今までの考えとは相当方向転換をしないと、ただ暗いイメージばかりの中身になるのでないかという気がします。

安島部会長：何かいい「言葉」がありますか。

田中委員：私は、この 11 日に２期目の市長選挙があって、実は無投票で当選ということになりました。私はさんざん考えた末に、市長選挙に立候補するときのキャッチフレーズとして「交流」と「創造」と「実感」という三つを作って選挙に臨みました。それを私がこれから目指すべき、過疎地域の目指すべき目標じゃないかということで、このキャッチフレーズを出しました。「交流」は人と人、広島市などの都市部との交流、それから物の交流、市内の世代間の交流などですね。都市との交流を通じて新たな産業を創る、先ほどお話が出ました、例えばサイクリングツーリズムをやるとか、その地域の特徴にあったものを「創造」するということです。

沖委員：今、田中委員が「交流」とおっしゃったのでそれに関連してあと少し申し上げさせてください。

仁坂知事が「田舎だからといって甘えてはいけない」とおっしゃったのは非常に心に浸みました。大河川の流域では上流と下流の交流という、水源地とその恩恵を受ける下流域の絆を強める取り組みがいろいろなところで行われています。ダムがあるところが主ですが、ダムがないところでも上流と下流の交流でそうした取り組みがあるのです。半島地域でも、特に非常に困窮する状況にある地域と、そうでない地域の交流というか、もう少しお互いを知ることが大事なのではないでしょうか。

「政府が何とかしてほしいと」訴えるのでも、政府の後ろにいるほかの地域の方、広く国民の方に「今、半島はこんな状況で、こうですよ」というのをわかってもらう、そういう取り組みというのが本当は大事なのだと思います。実際にはそれは大変なので、国民の総体を具現化している目の前にいる行政に「すみません、もうちょっと何とかしてください」と言う、そういうところを変えていかなきゃいけないのでないかと、私は思いました。

防災に関して、河川、土砂崩れは、知事もおっしゃっていらっしゃるとおり、普段は問題なくとも、ほかの地域と同様に非常に深刻な問題で、守り切れない状況もあるかと思います。津波に関しては、若干危機感がないかなと思いました。なぜかと考え

てみますと、南海津波とか、安政の津波の際に案外被害が少なかったというのが、やはり皆さんの頭にあるからではないでしょうか。なぜそれらの際に被害が少なかったかをきちんと学術的に解明してもらって、説明してもらって、あのときはこうなので被害がなかったですよと理解することから始める必要があるのではないでしょうか。次も普通の津波が来たらそのぐらいでしょう。だけどこういう条件で津波が起こったときにはこんなふうになりますからというような説明がないと、行政あるいは市民の間にも、いざとなったら逃げられるよと思ってしまうのだと思います。津波から逃げて助かった人の話しか今は聞けないわけです。逃げられずに死んだ人の話は聞けないのです。そういう方々が東日本大震災では２万人近くいる、ということを重く受け止めるべきだと思います。

最後、半島ということに関して、海と山が近いことから、非半島の過疎地域よりもある意味では有利なのではないかなと私は思いました。

今回印象的だったのは、勝浦漁港が生マグロの流通を持っているということから、交通インフラがものすごく不利であるにもかかわらず、それでもあそこでマグロを揚げる漁船がいっぱいいるということでした。今朝聞いた話では、流通を握っているのであそこに持っていけばどんなにたくさん揚げてもきちんとした価格で買い上げてもらえるという信頼感が鍵なのだそうです。つまり漁港の基盤整備だけではなくて、仲買人と流通といった仕組みがちゃんとできるというわけです。ある意味では、ハードとソフトの両方がそろっていて、交通基盤の不備をものの見事に跳ね返してらっしゃるというのが非常に印象的で、そういう意味では半島というのが、海と山が近いということをもっといろいろ利用していけばできることがあるのでないかと思いました。

安島部会長：マグロについて、もう少し高速道路ができるとさらに活気が上がるという話もありました。

鈴木委員：今回、私としては一番大きな印象は自信が人を伸ばす、という感じがしました。「過疎地域」という言葉には、卑しく生きるようなイメージがあるのです。半島地域の今日の話は、自分や人や社会を豊かにしたいと願う精神があふれ出て、誇りや人格ということを非常に感じました。本物の仕事、本物の生き方というのは美しい。条件不利地域と半島は考えられるのですが、自然に対して自分の力で生きていく、素の力で生きていく力を感じました。自分の力を信じて生きていくことが、活力の源泉になっております。集落単位で、手づくり自治というか、部分が全体をよくしていく、全体が部分にまた影響を与えていくという関係性のことを言っていました。小さなものを大切にしながら、半島という世界観をイメージの共用をして大きく作っていきながら、

小さいところがまた全体をよくしていくという相互作用が半島地域にあるのでないか。

日本中を同じカラーで作っていく必要もないわけです。半島のカラーというものを作っていって、今の自分を超えていくという、ここでいえば人格がある人が住んでいる、そういう人が住みたくなっている気がしました。できれば、そうした意味のある政策を作っていけば、日本の地域は、もっと自信を持って人も地域も育っていくのでないかなという気がします。

安島部会長：ありがとうございます。そういう意味で、道路を作るとか、あるいは交通対策とか、インターネットとかこれは整備すると、その年から便利になって効果がすぐにわかるわけです。ところが人材育成とか、みんなの考え方を変えていくとかいうようなこと、それから外から来た人が地域になじむとか、今日のお話では20年かかるというような政策です。一つは、それは時間がかかるということと、測りにくい。いわゆる指標として測りにくいようなもの、そういう性質を持った政策をどうしていくかということです。

私の専門の分野の観光関係も、人材育成を３年やったけど効果がなかったので、来年度から全部切られてしまいました。なくなっちゃったんです。それを続けても成果が出るかどうかわからないですけれど、人材育成みたいな、もともと時間がかかるような政策は、時間がかかるけれど、調査を継続していくことです。時間をかけて続けていくことが大事なのかなと思います。もちろんすぐに必要なこともやらなきゃいけないですけれどそういうことを大事にしていくことは重要だと私は考えています。

岡部委員：人材育成は時間がかかります。人の考え方や価値観は、私は基本的に複数世代にかかってしか変わらないものと思っていますが、人材育成にはそれが必要です。それがじゃあ数値的にどこに出てくるかというと人口に出てくると思います。戦後、半島地域では人口はずっと減ってきたと。初期のころは社会減だったのが、今は社会減はなくなってきていて多くのところは自然減のほうが上回るので、同じ減るということで性格が少し変わってきているわけです。こういうものの中にも、人の価値観が世代を超えて変わってきたことがじわじわと反映されていると。

そういう状況にあるところで、先ほど仁坂知事の話の中で、論理的に考えなければいけないというのは、とても私には響きました。この人口の問題、人口減、高齢化というのを、こういうときに必ずデータでは――今日のデータでもそうですけれども、当たり前のように出てくるデータです。これを、もう少し論理的に考えないといけないなと私は思います。

人口減少をするというのは前提ですので、人口が減少しても地域をどうやったら存

続させていけるのか。今日の色川の話でもありました。規模が小さくなるのは仕方がないと。だけれども存続していかなければいけない。そのために若者が少しでもいてくれれば、それも、そういうことを理解してくれる若者がいてくれればよくて、決して人口が増えればいいとかそういうことではないと。

高齢化に関しても同じです。高齢化率が今、急激に限界集落化しているところは、高齢者の数は、そう増えてないのです。人口減が響いて高齢化率が相対的に上がるということが起きていて、むしろ高齢化率の相対的に低いところのほうが、高齢者の数が猛烈にこれから増えるというようなことで、高齢者の問題がそっちにあることをもう少し客観的に把握しておく必要があると思います。

ですので、高齢者が高齢化率だけが問題なのでなくて、その地域が仮に小さくなったとしてもどう存続していくのか。高齢化率が８割だったとしても、今日、一人一区の人がいるという話を色川でされていました。それでも大丈夫な仕組みを作っていく。何かそういうことが、もう少し論理的に議論できるような指標づくりといいますか、データというのを、どうやって作っていくのか、これからの私たちの課題かと思います。

安島部会長：ほかに、いかがでしょうか。

野口委員：前に、私はいろんな半島地域で半島ツーリズム大学というのに、参加させていただいて８カ所ぐらいの半島を巡らせていただき、半島ツーリズムという一つのツーリズムがあるなと思ってきました。今回もいい半島ツーリズムをさせていただいたなと思いました。これからのツーリズムというのは、いいとこだけ見せるとか、いいとこを体験して帰ってもらうのではなくて、痛みの部分とか、またはあまりよくない素顔の部分というところまで、分かち合っていくというのが本当の交流ではないかなと思っています。

今回、山津波と海津波の両方のリスクを背負ったところの人たちが、でもかっこよく生きてる、そういうおじさんたちと会ってしまって、いいなと思えたのです。それは、単純な温泉観光できれいな景色だな、というふうに見物して帰る和歌山県とは違う。今回の、こんな災害があるんだ、こんなに危険なんだ、でもそこでこうやって生きてるんだという、またマグロを競りしているおじさんたちの誇らしげな姿とか、いいところと悪いところと両方を見て、私は半島の素の魅力を感じたように思います。

ですから、特に今までの観光地ではない、半島地域においての交流というのを考えたときに、私は負の部分も一つの財産として、きちんとお互い、よその人と分かち合っていくというのがあるなと思いました。

安島部会長：ありがとうございます。

鈴木委員：いろんな地域を私も歩いていて、これからの地域というのは、価値を創ることができるか、創造できるかという時代になっていると思います。それはインターネット時代で主体性とか、表現性とか、実行性――だれもが主体になれる、価値を創造でき、表現性が豊かであれば、いろんな形で個人でも物を売ったり、思いや志を実行できると。

この三つがあれば、今までできなかったことが色川地区を見てもできるという感じがします。どうやったら、半島の山間地や海や生活や、お茶やマグロにしても、宗教的な文化的な熊野にしても――こういう熊野古道もどうやったら、新しい価値を創造できるか。ほかの地域も、どうやったら多くの人が来やすくなるかとか便利になるかということではなくて、世界に意義のある品質の良い情報発信をしていくことが、自信につながったりして変わっていくのでないかと思います。可能性は半島地域や、こうした地域自体が本当は持っているのでないかと私は思います。

安島部会長：価値の創造というのが、我々が目指す、地域が目指すべきことだと思いますが、なかなか言うは易く、実行するのは難しいです。そういう意味で、何がそのポイントだと思われますか。

鈴木委員：小さなコミュニティやテーマ別のコミュニティには、不思議なことで飯を食べていたり、収入を得たりしている人がいます。その人たちが地域や日本に新しい価値を作る可能性があると思います。従来は、どこかに就職口が、働き口がと言ったけど、今は雇用がないので、不思議なことで飯を食べている人が増えてきました。誇りを持って自信を持って生きている人、何かそういうところに目をつけていきたい。

色川地区でも、不思議なことで飯を食っている人々がいます。若い人だけでなくてあれだけの人が移住し暮らしているというのは、どうやって飯を食べているかわからないというか、今までの経済とは違うような、生き方とは違う、そこに新しい価値が出てくる可能性があると思います。私はこういうことを「未確認飛行物体を見つけたい」と言うのですが、和歌山の未確認飛行物体をもっと見つければ、地域に何か新しい可能性があると思っています。

田中委員：鈴木先生、沖縄がいい例ではないですか。沖縄県いうのは日本で今、県民所得が一番低いんです。ところが出生率は日本で一番高いような――若い方が、しかも県外の方が沖縄へ定着するいうんですか。今、鈴木先生が言われた不思議な形でご飯を食べていると、暮らしとるいうのが、沖縄を研究すれば出てくるのではないかと思うんです。

鈴木委員：沖縄出身の人は仕事がなくても故郷に帰っちゃう。実家に居候して、仕事がなくても、家に住まわせてくれる寛容性があります。ですから沖縄の人口は社会増になっています。何かして食べているのです。陶芸家が一番多いのは沖縄だそうです。何も仕事がないから、仕方ないから陶芸でもやるかという。

安島部会長：確かに、経済合理性から言うと棚田をもう一度復元して……。今日も見ましたけれど、きれいに美しい風景としてよみがえっていました。ああいう非常に効率の悪いところをもう一度復元しても、経済的には割が合いません。本来から言うと放棄されていたわけですからね。でも、何か意味があるんです。そういうところは、ちょっと違う点から、再評価しないといけないのかなという感じがします。

野口委員：熊野古道を、私たちはほんの１キロ歩いただけで妙に仲良くなったり、すがすがしくなったりしたじゃないですか。それと同じように棚田も米を作るための棚田じゃなくて、人間関係を育てる棚田であったり、自然観察する棚田であったり、今までの物差しと違う物差しで、評価していっているのだと思います。それをもちろんわかってて、棚田復元みたいな、そこも活動をやっていらっしゃると思います。半島については、今までの物差しとは違う物差しを、いろんな物差しを持って当てはめていくことが大事だと思います。

田中委員：一人一人の価値観というんですか、色川も鈴木先生に言わせれば、どうしてご飯食べているかねというのはあるのですが、その人はそれでいいと思うんですよ。それは自分の価値観として、それが一番幸せな生き方という感じで生きているから、私らにはもう……ただ、行政の立場で言うと、人が減るいうことは実はものすごく苦しいことで非常に困難なことがたくさんあるんです。例えば交付税も、人口に応じて配分されます。非常に人が減ることで、さまざまなリスクといったものがついて回るわけです。

それは何かいうと、例えばもともと 100 人住んでおったところへ 30 人になる。30 人の人間が、その地域のインフラとかさまざまなものを背負わないけんいう問題が出てくるわけです。１人当たりの行政単価いうのも莫大に高くつくんです。３分の１になると、それぞれ今おる、そこで生活しとる人は、３倍の経費がかかるいう現実があるわけです。

ですから、何が何でも人を増やすことを、行政側におる人間は考える。ただ、人間として生きるため、その地域で生きたいということは、それぞれの方の価値観です。それは離島で暮らしても、山の奥で暮らしてもいいのですが、実際に行政を預かる者としては現実的に財政的なことを、これは財政に直結するのですが、非常に苦しいこ

とに縛られるようになると、それで四苦八苦しているのが今の実際の現状です。何とか人を増やすことを考えないといけんねということを考えるわけです。

鈴木委員：今の交付税は人が作った仕組みなんです。人口など量でいくという。どちらにしても 2050 年には、今の人口から 25%減るわけです。

色川地区では、新しい生き方や、色川地区に来た人のまた次の子どももそこに住んでいるという、今の移動社会の中で、土地に愛着を持って、愛を持って生きていく生き方もあるんだという多様性を示ししているわけです。

地域の U ターンの人が――今日も聞いたように、若い人が帰ってこない地域というのは、子どもに「出てけ」「出てけ」と言っている。だから人口が減っていく。２代、３代とずっと続いていくような地域では何か新しい価値が生まれてきています。新しい国土の住まい方や国土のあり方について、意志ある人たちに意見を聞いたときにも、行政に期待しているというよりも、自分の素の力で生きていると感じました。

今までは行政に依存しすぎ、行政が全部してくれるだろうという行政頼りで、ズルすることを考えていた。色川地区の人たちは、自分たちの力で生きていくという、ある意味で行政に頼らなくても、やれるところまでやってみようと言っている。こうした新しい価値観を持った住民のいる地域を、これから評価していくような国土政策が必要になるのではないですか。

安島部会長：どうぞ。

岡部委員：私は千葉大学におりまして、房総半島をフィールドにしていて、特に南房総の館山市をフィールドにしています。ここ、紀伊半島とまた違った意味で、不思議なことで飯を食っていると。もうちょっと東京が近いというところもあって不思議なことで、飯を食っている人がいて最近気づいたことを一つ――二地域居住がうまくいっている人というのは、何か不思議な副業を持っている方が多いです。もう１カ所の場所に行かなければいけない、不思議な何かを持っている人が多いと思います。

価値観について、一つは、価値観の創造なのか、価値観の再創造なのかなというのを考えさせられました。例えば棚田を復元する、段々畑を復元するというのは、昔の人たちは、それにすごい労力をかけて、ああいうものを作り、自分の素の力で、どこまで自然を克服できるかとの中で、生き抜いていけるかということで、すごい価値を置いていたわけです。

それが近代化の中で失われて、それでまた新たに、それが今、いろんなものに頼り過ぎている生活の中で、誇りを持って自分の素の力で生きられることが新たな価値になってきて、そういうのはある意味では再創造なのかなと、必ずしも新しいものだけ

ではないのでないだろうかということが１点です。

もう一つ、価値観の創造というのは、制約条件から生まれる。例えば食文化でいえば、あるときに大量に物がとれたのだけれども、腐ってしまった。あるときは食べるものがないということで、保存の方法などから新たな食文化が生まれてきたわけです。今の冷凍庫や、電子レンジがあるとそうした創造が、持てないのではないのか。少なくともそういう性格の創造は起きなくなってしまうのでないかと思います。

そういう意味では人口減少というのは、今、私たちに課せられた新たな価値を創造する制約条件だと思います。それは、こうしたデータの扱いもそうですし、量ではない何かで地域を見ていくとか、そのときに、地域をどうやっていい形で生き延びさせるかというようなことを、今、人口減少という制約条件の中で考えさせられていると思います。

安島部会長：おもしろいです。あまり支援し過ぎないほうがいいのですかね。館山では不思議な副業というのは、例えばどんなことをおっしゃっているのですか。

岡部委員：不思議な副業……。はい。私は国土の長期展望の関係で、寺島実郎さんと一度お話をしたときに、同じ二地域居住でも、生産的に意味のある二地域居住でなければいけないというお話が出てきて、何かそれが私は頭に引っかかっていたんです。

一つの例で、それほどおもしろい例ではないかもしれません。サボテンとか、ああいうものを、もう一つの家で作っていらっしゃるとか。奥様のほうは、NPO 活動をされていて「子どもたちが自然に親しむために」というような活動をされています。それだけでどうして家族で、毎週末行けるかなと私は、ずっと不思議に思っていましたら、旦那さんが――それは商品価値があるものだと思いますけれど、多肉植物とかそういうものを育てられているんです。何かそういうのがあることによって家族で毎週末、小さなお子さん２人連れて房総半島に行くというのが成立していると。

野口委員：サボテンも、すごく高いのがあります。だからそういうのに絞って、作っていると思います。

岡部委員：「あまり言うな」と言われています。「泥棒に入られると困る」と言われているので。

野口委員：わかる、わかる。

安島部会長：今回は二地域居住みたいな話は、あまり出なかったですけれど、二地域居住的なことは時代と共にいろいろな形のものが出てきます。今日は、色川地区が、非常に皆さんにいろいろ大きな衝撃を与えたようです。ああいうような場所について、さらに調べる必要があるのかなと思いました。

私の専門は観光ですが、半島には結構大きな温泉地とか、いろんなところに観光地があります。今回泊まったホテルは巨大な建物で本当に迷いました。あれも、想像を絶する大きさで、最盛期には 4,000 人が泊まったなんていう話に本当に驚いたのですけれど、どうもその最盛期から 30 年、40 年たっているような気がします。本質的にあまり変わっていないというところが、やはり問題かなとちょっと思います。どんな産業でも同じコンセプトで何十年もやっていたら、絶対に飽きられてしまう。今、全国の温泉地等が抱えている問題は、新しい価値の創造ができないというところかなと思います。この白浜でも、同じような問題がきっと起きていると思います。それを抜きにしては、観光面の振興というのはとても難しいと率直に思います。

それで、お風呂の中で鈴木先生と一緒に話をしたのです。これはいっそのこと、レトロツーリズムというコンセプトで……。

岡部委員：「まだあった、こんな観光が」という、そういうのね。

安島部会長：はい。それで、昔の会社の職場旅行で来た部長だった人とかを呼んで、みんな、部長とか課長がたすきをかけてやるとか。

岡部委員：宴会場でね。

安島部会長：半分、冗談ですけれど、そういう同窓会みたいなとか、レトロみたいなものを売り物にしてもよさそうだと、昨日話をしました。

鈴木委員：先ほど言ったように表現を変える、視点を変えるとか、コピーを変える。そうするだけで、地域が新鮮になって見えてきます。古い街並みなども、ただ街並みを景観工学的に作っても、今は、寂しい状態になっているのです。

いいなと思う古民家は、そこにプラスアルファをつけている。さっき、再創造ということを言いました。調べたりしているのは、街並みプラスアルファ。先ほどの安島先生の話は、レトロな温泉プラスアルファ。表現を変えていくことによって、古民家、街並み、山村、漁村も、何か新しい価値を持ちます。再創造のほうがいいかもわかりません。創造もあり、再創造もあると考えたらいいのかもしれません。

アジアの人が面白がったり、また欧米の方も熊野古道に来るというのは、共通する価値がどこかにあって、表現方法を変えるだけで伝わっていく時代だなと思っています。インターネット時代は、そういう表現力を持っていると思います。

和歌山県の広報も送っていただいて、県のイメージが変わるような情報、仏教と宗教というものを非常に新しい観点から捉えたり、いろんな形で新しい和歌山の文化を情報発信をされていて、感心しています。

岡部委員：今、古民家と街並みという話がありました。私はもともと建築・まちづくりが

専門です。おっしゃるとおりですでに景観工学的、あるいは建築史的、都市史的に価値のあるものから再生されてきているので、今、残っているものは相対的に二流、三流のものなんです。古民家にしましても、街並みにしましても。街並みも、すごく歯抜けになっていて、５戸に１戸ぐらいしか残ってないような街並みが、全国にごまんとある。でも確かに歴史的価値のある建物が、ちらほらあるというところが多いわけです。

そのときに、フィジカルな建物や街並みだけではなくてそれにプラスするもの、プラスアルファをどう作るかというところで、今、私たちが一番格闘しています。例えば、今、私は館山で、古民家の再生を学生たちとやっています。それもプラスアルファで一つの物語を作るようなことをしています。決してきれいに、美しい民家を再生するのではなくて、毎年、学生たちが刈ることのできた茅で、雨漏りしないように茅の屋根を直していくというのを始めています。そうすると、毎年葺き替えを少しずつやって、ぼろい茅葺きの家が維持されていきます。例えば、ロケでもそっちのほうが価値があったりするんです。しかし、きれいに民家園にある民家というのは、そういう生活感がないので価値がない。地元の方々も心配して付き合ってくれるということで、地元の人たちも来て一緒にやっていただいていて、それもプラスアルファの価値になっています。

今度、街並みのほうでも、また同じようなチャレンジをしようとしています。そのプラスアルファは、やっぱりストーリーだったり、そういうお話だったりそれは昔あった価値を思い出させるような話じゃないかと思っています。

野口委員：話題が変わります。昨日と今日の行程の中で、実は私はあんまりおいしいものを食べたという印象がなくって、一番おいしかったのは、事務局が用意してくださった、バスの中で食べたミカンです。このミカンのことは忘れられないんですが、あと何を食べたかというのは、あまり思い出したくないものばかりです。これはスケジュールの中でしょうがないというのもあるし、選んだお宿の問題だって「レトロが」というふうに理解をすれば、「そういえば、昔こういうのを食べてたよな、大宴会で」とそういう体験だと思えばそれで済むんですけど、せめて例えば生のマグロの尻尾のここを、今ほじって食べたいよねと、さんざん皆さんとお話をしたんです。量じゃなくて、この串本のここでの、この一口という、それが忘れられないものになると思うんです。

半島、つまり山と海、これは非常に逆に贅沢なんです。両方を抱えている半島だからこその、半島食というのがあると思います。それをもう一回整理されるといい。いわゆるレトロタイプの観光地をすぐに直すということはしなくてもいい。それはそれ

として、例えば、今日お会いした色川の人たちが、おもてなしのときに何か、お料理を出してくださるとしたらどんなものがあるだろうと。きっとわくわくするものが出てくると思います。食べ物って、必ずお年寄りも子どもも、日に３回経験することです。印象深く残ることで、また自分が食べるときにそのときのことを思い出す。となると、大変影響力があることなので、半島の価値を見出すためにも、半島食を、もう一回洗い直して仕立て直すといいなと思いました。

安島部会長：いろいろな資源としては、温泉もたっぷりあるし、海の幸、山の幸があるし、世界遺産の熊野古道もあるし、非常に条件に恵まれていて制約があまりないので、これまで伸びてきたときはいいんだけど、やはりイノベーションが起きてないのかなという感じをちょっと受けます。だから可能性は、すごくあると思います。今日、いろんな方のご感想を聞いた私の実感としてもそんな感じを観光について感じます。

鈴木委員：料理も地域素材の表現方法だから、表現方法を変えていけば、面白いと思います。これまでの旅館は同じパターンの表現しかしてないし、弁当も同じような表現しかしてない。今日の昼の料理は表現方法を工夫していると思いました。夢と志、知恵が料理を変えていきます。

安島部会長：そろそろ時間でございます。知事さん、何かございますか。

仁坂委員：今日は、できるだけ皆さんに意見をお聞きしようと思って黙っておったんでありますが、最後にたくさんしゃべらせていただきます。

まず、皆さんのお話を、ちょっとつまんで最初に申し上げます。まず資料でございます。人口増減と、いろいろなほかの資料に合わせてのドットがあります。よく見ていただきますと、ドットがないところがあるんです。どういうところかといったら、人が住めへんところだとか。実は和歌山県というのはドットがないところがあまりないんです。ものすごい急峻なところとか、北アルプスの尾根みたいなところにはないので、どこへでも大体住めるのです。住んでおったんです。住んでおったがゆえに、いろんなものもあり、そこで住み続けることの辛さみたいなものもあって、それで、いろんなごちゃ混ぜの現象が、皆さん、今日議論されたような話が、たくさんあるところということであると思います。

第２に、沖先生が、民間業者がやっているインフラが大きいんだというお話がありましたが、実はそうなんです。ただ、実はこれは行政としてはほっておいていいかというと、全然違います。行政が、実はかなり影響力を行使できるところなんです。和歌山県は、通信系で、三つの運動をしていました。一応、一段落はついているんです。地デジを、全部入れるようにしよう、それから全ての集落で携帯がつながらなきゃい

けないと。ついでに、熊野古道もつなげてしまえと。それから、全ての集落でブロードバンドがつながるようにしようというふうにしました。一番最後の展開をいうと、実はADSLも入れて、全部達成しています。

それから携帯は、まだちょっと残っておりますが、これ全部民間の方がやる話なのでね。どうしたらええかというと、こちらで光を引くときに、半分貸してあげるからやってくれと言ったり、それから単純に頭を下げるというのもあります。頭を下げる。例えばドコモへ行って頭を下げる、それからａｕやソフトバンクへ行って頭を下げると、そういうこともあるわけです。

それから地デジ。これは、なぜこういう問題が発生したかということを論理的に考えると、全て国の責任と、それからテレビ会社の責任です。なぜならば帯域を分けようというところから発想して、幸せにアナログを見ている人たち――それが大変な投資をして、アナログを見ている人たちを、おまえらに見せてやらないんだもんねと言うわけです。そんなもの、放送法の趣旨からすれば、当然その利用者が払わないといけない、あるいは国がもしそれを命じているんだったら、国がやらなきゃいけないのに「知らんもんね」というようなことが強くて。

これは何したらいいかというと、国に対して論理的に怒鳴りつけることなんです。それでやりました。そしたらじわじわと手厚く対策をしてくれるようになって、本当だったら100％払わなきゃいけないと、これは論理です。しかし、田舎のおばちゃんが今まで見てたのに、地デジ波の受信装置を何で山の上にもう一回立て直さないといけないと、冗談じゃないということなんだけど、そこはそんなこと言ってたらだめだから妥協して、ほどほどなことをやって、今は全部見られるんです、アンテナを入れてやれば。それから作ったのですが、前に比べたら圧倒的に維持経費がかかるんです。こういうことについては、まだこれは論理的な問題として、国に言っていかないといけないということだと思います。

それからADSLじゃだめなんです。今日の色川の人たちなんて絶対に、コンピューターで世界とつながっています。そういう人たちなんです。そういう人たちが来てくれるためには、光ぐらいはちゃんとサポートしてあげないと「そんなところはだめだね」という話になって。さっき変な副業というのがありましたけど、実は移住・交流で来てくれる人たちは、ある程度仕事を持っている人です。そういう人たちで例えばグラフィックデザイナーの人がいて、親子で来てくれて――息子さんがグラフィックデザイナーです。それはここではありませんが、和歌山の必要なところで商売をするためには、通信回線はあっという間につながらないと全く仕事にならないということです。

ということで、大変やらなければいけないことがたくさんあります。

それから、さっき鈴木さんが、ヒステリックでなく対策がうまくされていると言われました。実はヒステリックにやったのです。ヒステリックにやらないと、東北のような被害をうけることになります。津波のときに我々が助けに行ったんです。自分の問題だからと。それで一所懸命、関西広域連合で分担して、我々は主として岩手県を手助けました。

もう一つ、鈴木さんが「バランスがいいな」という話がありました。これはそのとおりであって、我々は、例えば山と川が迫っているんです。先ほどもお話がありました。それは、とても大変なんです。大変な代わりにいいところもあるわけです。

例えば津波から逃げ切るということを考えると、実は一番危険視しているのは、ちょっと山から遠いところの市街地に住んでいる人です。南の端の串本に。これが一番危ないです。これに対策をたてようと思っています。山裾に住んでいて、すぐ海だという人は、数分間で山にうまく駆け上がりさえすれば命だけは助かります。したがって、防災だけ考えてもそういうことだし、景色はいいし、それからさっき岡部さんが言われたように、ゆったりとした生活が流れているなら、うまくエンジョイすることもその資源の中ではできます。

岡部さんのガリシア州の発音を聞いていたら、私の発音と違って「おお、スペイン風やな」と思いました。和歌山県は、道の世界遺産の二つのうちの一つですのでガリシア州と仲が良くて、道の姉妹道――あれの提携もしてるんです。それで行ったり来たりして、この間も、実はそんな経緯があったんです。さっき言われた中で「ゆったりとした流れがあっていいな」というような話があって、まさにこれが我々の売りどころだ、と思っているわけです。

都会の人は、都会の人の悩みがあるし、田舎の人は田舎の人の悩みがあるけど、みんな効用というのは希少性の産物ですよね。ですから、都会におっての田舎生活的なものがなくなればなくなるほど田舎生活に希少性が出てきて、これは我々としては、もともとの資源をうまく活かせるということだと思って、それをどうやってうまいこと活かすかというのは、次は戦略の問題になるんです。一番大事なのは資源の保全です。和歌山県は、６年前に私が知事になったとき、直ちに景観条例を、西村幸夫さんという方にお願いをして、徹底的にすごいやつを作りました。高野山、あるいは熊野古道は複雑なシステムになっています。特別景観地域にして、「小さい家も簡単に色をつけるな」と言って。熊野古道風の――昔の我々が持っている熊野古道風の環境を守ろうと。下の（国道）311 号という和歌山県きっての道もあります。そこには「がちゃ

がちゃと看板立てるな、これ以上」とか。あるいは、新しくサービスエリア、道の駅ができましたが、そこの色をこうしろとか、そんなことをやって。そういう都会の方に味わってもらえるようなやり方をやっていったらいいなと思います。

ただ、先ほど岡部さんが言われた、棚田の動機。あれは違います。昔は食っていけなかったから、棚田でも耕したのです。山の中に住んでいる人がいて。だけど今は違うわけです。別に、そこに住んでなくてもいいんだから。そうすると次は新しい効用、あるいは希少性の発見がある。それは再発見じゃなくて、僕は発見だと思います。こだわって申し訳ないです。

和歌山県は、それを二つの点で懸命やっています。一つはさっきの移住・交流です。色川の方々なんかの話がありました。これはお話をお伺いになったと思いますが、実は秘密があります。和歌山県は、移住・交流の推薦地域を指定しています。そこでの要件は地元で協議会を作ることです。その協議会は、例えば今日、多分原さんという方にお会いになったと思うのですが、彼なんかはパイオニアです。原さんも来たときは、もうちょっと前にも、また１人いたんです。そういう前にいた人が、地元の人とすごく仲良くなってそれで仲良くなった両方が先生となって、新しく来たいという人に全部教育するのです。それから説教をします。変な人が来たら、「あんた、無理だからやめなさい」と言う。そこまでやって、受け入れるものですから、数は少ないですけど大変、定着率がいいわけです。それで自分たちの仲間として受け入れる。そのためには「あなた、生活はちゃんとできるんですか」と。多分、本当の副業があるか、ある程度は、資産がないとできません。結構、資産がある人が多いので、ほどほどに、そんなに無収入でなければやっていける人が来るわけです。そうすると、その人たちがやっていけるように――我々は、ほどほどにやっていけるように、ちょっと助けてあげると。例えば水道は、原さんのところは、あの水害でむちゃくちゃになっているわけです。この水道は自分の水道なんです。自分で作った水道なんです。自分で作った水道だから、公的復旧ができないのです。災害の公的復旧ができないのでどうするかといろいろ考えて、えいやといって「過疎生活圏」という和歌山県の、これまたヒット商品、その対策の中で、水道を直せと。でないと、そこに何十年かけて少しずつ谷川から引いてきたおじいちゃん、おばあちゃんが、また自分で直せと言われたら、へたばってしまうわけです。それを、助けていかないといけない。

それから、実は二地域居住というのがあります。これは色川でもあります。ある名古屋のお医者さんが、あの地域に１年の半分ぐらい見えています。ご家族は、やっぱり名古屋生活のほうがいいなというので残っておられるらしいです。やっぱり、それ

じゃあおもしろくないから、半分こっちへ来てちょっとみんなと楽しくやるんだ、という方がいらっしゃいます。その方が、じゃあほいほい来られるようにするためにどうしたらいいかというと、色川まで、ものすごくいい道は要らないんですけど、例えば勝浦の海岸線ぐらいまでは、名古屋から、ぴゅーっと来られないとへとへとになって、そろそろ来られなくなっちゃうかもしれないです。千葉は、そんなことはないわけですけど、そういうところをちゃんと目配りをしておかないと難しいということがあると思います。そういうことを今、やっています。

もう一つは体験観光というのが、皆さんからお話がありました。それも実は和歌山県のヒット商品です。これは、それぞれの農家が自分でミカン狩りさせてどうぞとか、それから業者さんなんかでクジラをホエールウォッチングしましょうかとか、そういう話がたくさんあって、それを一つのパンフレットにまとめて宣伝をしています。で、勝手に申し込めるわけです。勝手に申し込んで、お客さんと勝手にやるんですけど、それを、後で報告だけ受けたらなんと 26 万人――今はちょっと減って 26 万人ですが、年間に 29 万人が、そのために来てくれています。岡部さんがおっしゃるように、都会では味わえない生活を、やりたいという人がたくさんいます。本当は、これが我々の強みだと思います。

それから、田中さんが「津波で、皆同じだね」とおっしゃったんですが、串本町は違うんです。すぐ逆らうんですけど。なぜかというと、和歌山のほとんどの地域も、田中さんのところと同じようにして逃げればいいんです。100 年に１回しか来ないんだから、３代か４代かけて家は建て直せばいいということですが、死んじゃったら子孫ができませんから、逃げなきゃいけない。でも、逃げられない――さっき申し上げたようなところ（串本町）については、これは人道の問題として本当に手厚い対策はしなきゃいけない。我々もしますけれども、本当は国もしなきゃいけないということではないかと思います。

それから、野口さんがさっき、「辛抱」というようなお話をされました。それから、家庭でどんなことをしゃべっているのかというのがあって、それでなかなかいい生活ぶり、精神的にいい生活をしておられて立派だ、というお話がありました。そのとおりであります。我々はやっぱり文句を垂れているばかりで、それで嘆いていてもしょうがない。そんなことをしているよりは、東北の人たちと同じように、それぞれ現実的に自分で戦略を立てていけばいい。地方公共団体は、そういう戦略のうちで、住民一人一人が見えてない、向こう側からの視点です。東京の視点、あるいは大阪の視点で物を見たときに、どういうふうに見えるかということから、地元の人とよく相談を

して「こんなのがいいんじゃないですか」というようなことを申し上げていきながら、助けていくというのが大事だなと思っています。

それから、さっき未確認飛行物体の話が、鈴木先生からありました。私は、これは間違いだと思います。未確認ではいけないんです。未確認の中に、科学的に解明できて、それでちゃんと分析できることがあるはずです。それはさっき言いました、例えば都会の生活と田舎の生活の希少性とか、生活はどうやって成り立っているのかとか、そういう科学的にきちっと分析できることがあるはずなので、それをもとにして、例えば国土交通省や県が政策をきちんと立てていかないかんと。学者先生は、未確認のままほっといていかれてはいかんということではないかと思います。

それから、沖先生が勝浦のマグロの話をされました。同じような話で、「ものの見事に、交通基盤の不利を跳ね返しておる」とおっしゃいました。辛うじて、跳ね返しているので、何とか跳ね返せているけれども、ものすごい大変なんです。例えばあそこにクロマグロの生も揚がります。揚がって、築地でもう一回、例えば一番いいお客さんを仲買の人が見つけるために持っていくのです。そのときに、早く持っていけるか、あるいは楽に持っていけるかは全然違って、下手をすると「いや、もう勝浦をやめて焼津に全部揚げたらいいんじゃないの」という話になるわけです。もちろん築地との関係でいえば、焼津と勝浦は遠さが違うので同じルールにしなければいけないというのはこれは全く間違いです。そこでやるんだからおまえの勝手だろうと。だけど少なくとも 70 キロか 80 キロで走れる道ぐらいで、行かせてもらわないと辛いじゃないか、チャンスも奪われてしまうじゃないかと、こういうことは言えるのでないかなと思います。

そこで、一般的にしなきゃいけないと最初に思っているのは、ナショナルミニマムだと思います。半島でも過疎でも。

安島部会長：すみません。本当に申し訳ないのですが、どうも飛行機の時間とかありまして。

仁坂委員：そうですか。――じゃあ、ちょっと速く言います。

一つ、ナショナルミニマムをこういう場でちゃんと考えるべきであると。ナショナルミニマムを考えたときに、それだけ保証してあげようね、と日本国民だったらと思うと、さっき田中さんがおっしゃったように、人口が多ければコストが少なくなるというのもあります。ですから、人口が少ないとかあるいは、例えば距離が遠いとか、半島の先端であるとか、客観的にいろんなことが言えると思います。そういうことで、多少ハンディキャップをつけてあげてもいいのではないか。これが一般的な政策では

ないかなと思います。

二つ目は、チャンスを最低限保証するようなメカニズムをきちんと作るべきではないかと。これは日本国民全体に言えることであります。例えば「高速道路って、おまえ、土建屋の味方やろう」とか、すぐそんなことを言う人がおるんです。例えば 90 年とか、今から 10 年間、20 年間、先進国の例えばドイツは、もう終わりじゃないのと。あのドイツと日本と比べるとどっちが延長距離が多いかと、実はドイツのほうが多いです。アメリカのほうが多い、フランスのほうが多い、中国も、もちろん 100 倍とか 1,000 倍に……500 倍とか、いや、違う、違う。100 倍とか 200 倍になっているわけです。競争力の源泉なんです、そういうことは。この和歌山というのはそういう点で高速道路を考えると、江戸時代はものすごく偉かった。なぜか。高速道路は海路です。それが鉄道の時代になって、国防の観点もあって、国は大体引いてくれた。そのときは、そんなにやられていません。高速道路の時代になって、あんたのところは後まわしだと。例えば東京と和歌山でいえば、圧倒的に、昭和 40 年代、50 年代ぐらいまでは、東京のほうが、実は人口比に対して投資額が多く、ようやく田舎に来ました。そしたら、もうやめということが多くて、これはほとんど国土政策として、むちゃくちゃということではないかと。順番は、つけていいと思いますけど。

それから、防災は多分、人の命だけは助けようということで、人の命を助けるために我々がやらなきゃいけないことはたくさんあるのです。避難するとか、小さいタワーを作るとか。だけど大きく言えば、幸せに暮らしているような、だけど（津波が来たら）必ず死ぬような人たちを、どうするのかねということだけは、本当に考えておかないと殺人者になってしまう。それは、地域だけではなかなか難しい。それからその次に、助けに行くためには、助けに行くルートを作っておいてくれと。これは東北は（道路が）「くしの歯構造」で、助けにはすぐ行けたのです。紀伊半島だったら行けません。そういうことを、やっておかないといけないということを思います。

それから、ただ自分で（知事として）やることがたくさんあるのです。戦略を立てるのは自分の仕事です。自分たちの仕事です。そういうことを考えるときに、先ほど言いましたような、希少性とか、地域の持っている特色とか、そういうものをどうやって売っていくかということを考えて、必要な体系を立てた戦略を作っていけばいいと。

和歌山県の反省を言えば、和歌山県はさっき一番初めに「多くのところに人が住んでいるんですよね」と申し上げました。多くのところに道を作りました。その結果、山奥へ行っても、ものすごくよくなったり急に悪くなったり、ものすごくよくなったり。これはおかしいと思って調べてみますと、未完成率日本一でありました。道路は、

ネットワーク化して意味があります。今やっているのは、ネットワークの整備です。和歌山県は海岸を 42 号線が通っていくだけですから、真ん中に県内をＸ型に縦断する道路を、いろいろつなげてちゃんと走れるような道を作っています。

交流の話が沖先生からありました。Ｘ軸ネットワークが完成したので、今は川筋ネットワークというのをもう一個を作って、昔の川筋の交流圏を、もう一回復活させようというようなことをやっているわけです。

さらに、それでも足りないのはやっぱり国がやらなきゃいけない、高速道路なんですよね、というようなことをいつも言っております。これは、学会で発表してもおかしくない話のはずなんです。そういう話をしながら、政策をやればというふうに国に関しては話していきたいと思います。

安島部会長：どうもありがとうございました。いろいろこの話題に対して、コメントをいただきまして今後の参考にさせていただきたいと思います。それでは時間が大幅に超過しておりますので、この辺で本日の議論を終了していきたいと思います。今後、平成 26 年春ごろのとりまとめに向けまして、半島振興施策の評価や、今後の振興の方向性について検討を進めてまいりたいと思います。各位におかれましては、引き続きご協力をよろしくお願い申し上げます。本日はどうもありがとうございました。それでは事務局のほうにお返しいたします。

長崎地方振興課長：最後に二点だけお知らせがございます。一点目は、次回の部会をいつごろ開催するかという点ですが、来年の春ごろに開催したいと思っています。取りまとめは、再来年の春ですので、その１年前ということになると思います。本日の議論を踏まえて、少し論点なども整理してご検討いただきたいと思います。日程につきましては、部会長のご都合を伺った上で、もう少し近くなりましてから、日程調整をさせていただきたいと思います。

それからもう一点、本日の議事録につきましては、皆様に確認していただいた上で公表したいと思いますので、よろしくお願いいたします。ただ、それをかなり省略した議事概要というのは事務局の責任で、簡単にまとめて早めにホームページ等で公開したいと思いますので、ご承知おきいただければと思います。以上です。

安島部会長：どうもありがとうございました。

（了）